



NPO 国境地域研究センター企画 中露国境紀行 2018

黒河からブラゴベシチェンスクそして大連、旅順へ

中露国境紀行も今年で第三弾！

今年はロシア極東のブラゴベシチェンスクから中国北辺の国境の町・黒河（ヘイヘ）から遼東半島の南端大連、旅順へと足を延ばします。既に 2 年間にわたり中露国境紀行では中ロ国境であるアムール川（黒竜江）を綏芬河＝パグラニーチヌイ、ハバロフスク＝撫遠と二度越えてきました。今年はブラゴベシチェンスクと黒河（ヘイヘ）を往復します。

今回訪れるこの地域（ブラゴベシチェンスク と中国北辺国境の黒河から遼東半島南端の旅順まで）は歴史的にみると、明治期の日本人の往来、日清戦争、日露戦争、シベリア出兵、第二次世界大戦へと日本とロシアが大陸への覇権を争った地です。その日本、ロシア、中国の三国の歴史的事実を追いつながりながらその場所に立って見る。そして現地の今を見つめる旅となればと思います。

同行されるのは毎年ご同行を御願ひしております北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授の岩下明裕先生と京都大学名誉教授の木村崇先生です。今回もお二人の博学で楽しいお話が聞けると期待しております。

<ブラゴベシチェンスク>

○アムール川（黒竜江）事件（江東六十四屯事件）の跡地をめざします。

江東六十四屯事件とは：当時アムール川沿岸のロシア領内に多くの中国人の居住地がありました。その面積は 3,600 平方キロ、六十四もの村があった事からもその広大な地域であった事がわかります。1900 年の義和団事件の際に、清朝の混乱の乗じロシア軍がアムール川河畔に進軍し中国人住民を虐殺し追い出した事件です。現在 GoogleMap でみるとそこはそんな悲劇があった事を物語るものもなく広大な農地や草地となっています。

このアムール川沿いの地域は国境地帯でもある事から現在アムール州・コンスタンチノフカ村に入城の許可を申請しています。広範な六十四屯の地域はバスから見ただけであれば問題はないだろうとの回答も来ています。その歴史的な場所へ行き見る事を目指し準備中です。

昨年の旅同様に乞うご期待！

○石光真清の活躍

明治から大正にかけて中国・ロシア等の諜報活動に従事。1899 年にここブラゴベシチェンスクに留学しています。石光はそこで上記「アムール川事件」の目撃者になります。

激動の時代の中で波乱の人生を送りその自伝的手記が「城下の人」など四部作として出版さ



れています。近代日本と当時の東アジアの歴史的資料としても高く評価されています。

岩下先生の解説も。乞うご期待！

- 1890年（明治23年）6月26日チューホフはサハリンへ行く途上でブラゴベシチェンスクに逗留しています。当時ウラジオストクやハバロフスク同様、ここブラゴベシチェンスクにも日本人が暮らしており、日本からのからゆきさんがいた事をチューホフは友人ズボーリンに宛てて手紙を書いています。木村先生の解説も。乞うご期待！

- シベリア出兵・イワノフカ事件とシベリア抑留

1919年3月22日シベリア出兵の際、日本軍が抗日パルチザン掃討作戦の名のもとにブラゴベシチェンスク近郊のイワノフカ村を焼き尽くし多くの地元民が犠牲になったイワノフカ事件から来年で100年になります。

シベリア抑留ではアムール州だけでもおよそ4,000人が抑留され、3つの収容所、35の埋葬地があります。シベリアへ送られた日本兵の多くは満州各地から集められ黒河からアムール川（黒竜江）を船で渡りブラゴベシチェンスクからさらに様々なラーゲリへ送られたと言われています。今ではシベリア出兵で犠牲になったロシア人とシベリア抑留で犠牲になった日本人とともに慰霊する碑がイワノフカ村に建てられています。献花をしたいと考えています。

- ブラゴベシチェンスクと聞いても今の私たちにはほとんど馴染みのない町ですが、現在のブラゴベシチェンスクはアムール州の州都でありウラジオストク、ハバロフスクに続くシベリア第三の都市として発展しています。石光に限らず、その後も満州国政府の役人であった方からも満州国政府の役人がソ連情報収集にブラゴベシチェンスクに出張していた話を聞いたことがあります。明治から日本とのかかわりのあった町を様々な視点で訪れます。

<黒河>

黒河（ヘイヘ）は現在、ブラゴベシチェンスクとの間で活発な国境貿易が行われている活気ある街です。1858年にロシアと清の間で黒河市に於いてアイグン条約が結ばれました。この不平等条約はその後の中ソの国境紛争に一因となったと言われています。歴史的事実を展示している黒河愛輝歴史陳列を訪問します。

<哈爾浜>

市内観光の他に可能であれば黒龍江省社会科学院を訪問する予定です。

<大連・旅順>

最近では中国と北朝鮮の指導者が大連で会談し注目を集めました。ロシアも日本もその領有を争った大連・旅順。そこを同行をお願いしている二人の先生と訪ねるまたとない機会となると思います。こちらも見どころ満載です！

皆様のご参加をお待ち申し上げます。ロシア側の許可申請があるので7月20日が締切です！！

参加をご検討の方はお早めにお申込書をお送り下さい。お待ちしております。 担当：濱桜子



<参考文献>

○岩下明裕著

『中・ロ国境 4000 キロ』角川選書

『中・ロ国境の旅』「4000 キロ」の舞台裏—ユーラシアブックレット 東洋書店

※中露国境の実相を「蟻の眼」で描くアカデミック・ルポ！

新たな文明の断層線かそれとも和解の架け橋か。行動する国際政治学者が中ロ間の国境

4,000 キロを踏査した報告、学識と汗が結晶した書物。(下斗米伸夫)

→このツアーの基本読本ともいえる本です。是非ご一読いただければツアーの楽しみも倍増します。

○石光真清著

『城下の人』(中公文庫)

『曠野の花』(中公文庫)

『望郷の歌』(中公文庫)

『誰のために』(中公文庫)

※明治元年に生まれ、日清・日露戦争に従軍し、満州やシベリアで諜報活動に従事した陸軍将校の手記

四部作。第一部は、故郷熊本で西南戦争に遭遇した後、陸軍士官学校に入り、日清戦争に従軍するま

でを綴る。未公開だった手記『思い出の記述(抄)』及び小説『木苺の花』を併せて収録する他、口絵

にて本人の直筆原稿等を初公開。(紹介文より)

○麻田雅文著

『日露近代史—戦争と平和のための百年』(講談社現代新書)

『満蒙』—日露中の「最前線」(講談社選書)

※幕末以来米英基調の週流派に対しロシアに目を向ける潮流があった。ロシア皇帝との信頼関係を

築いた伊藤博文や満州経営の為ソ連との国交樹立に腐心する後藤新平、満州国建国後孤立を深める中

独ソとの提携に望みを託す松岡洋右…。1918年から7年に亘るシベリア出兵、1939年ノモンハン

から満州での国境紛争の数々そして1945年ソ連への和平仲介依頼とソ連参戦の衝撃。幕末から敗戦

までのロシアとの「戦争と平和」の歴史を巡る日ロ関係の傑作。(紹介文より)

○船戸与一著

『風の払暁—満州国演義』 (新潮社文庫)

※麻布の名家に生まれながら、異なる生き方を選んだ敷島四兄弟。奉天日本領事館の参事館を務め

る長男・太郎、日本を捨てて満蒙の地で馬賊の長となった次郎、奉天独立守備隊員として愛国心

ゆえに関東軍の策謀に関わってゆく三郎、学生という立場に甘んじながら無政府主義に傾倒して

いく四郎…ふくれあがった欲望は四兄弟のみならず日本を、そして世界を巻き込んでゆく。未曾

有のスケールで描かれる、満州クロニクル。(紹介文より) →旧日本軍が中国大陆を我が者顔で駆け抜

けて行った様子が良く分かります。黒河も哈爾濱も大連も……。それは広大な中国の領土だけではなく、

ソ連との国境地域まで様々な動きをしていたその地理的なその広大な広がりを実感できます。面白い。